

ドイツ第三帝政期における幼児教育の概要

人文学部教授 勝 山 吉 章

○はじめに

本研究の動機は、今の日本が1930年代の日本やドイツに似てきたと筆者が捉えていることにある。金融が暴走し、資本が独占化を進め、軍拡と人権の制約、虚偽を繰り返す為政者と立憲主義のほころび、人種論を想起させるヘイトスピーチの横行など、全体主義前夜と言っても過言ではないだろう。幼児教育では、教育勅語の奉読、宰相万歳を園児に行わせている幼稚園が問題化した。これは為政者が強権的に行ったことでは決してなく、いわゆる「下から」の全体主義と言える。幼児教育史研究として1930年代のドイツを振り返ることは、現代日本の幼児教育の在り方に警鐘を鳴らすものであろう。

ナチズム（国家社会主義）と教育に関するわが国の研究は、それなりの蓄積をもつ⁽¹⁾。また邦訳を含めて、ナチズム下の家庭や幼児の生活からナチズムの実態に触れたものも多い。だが、「ナチズムと幼児教育」をタイトルにし、それに限定した研究は、不思議にほとんどない。戦前期に、文部省教育調査部がナチズムと幼稚園について調査したものと⁽²⁾、1993年に来日したP・ミツツェンハイムの講演録（荘司）ぐらゐが散見される⁽³⁾。

ドイツ本国でも、それほど多くはない。それはヒトラーやナチズムが、少年団（10-14歳）やヒトラー・ユーゲント（14-18歳）につながる国民学校以上の教育は重要視したが、幼児教育にそれほど関心を示さなかったことに要因の一つがある。結論を先に言えば、ナチズムは当初、優生学（Erbpflege）を根拠に人種学（Rassenfrage）、遺伝学（Erblehre）に導かれた母親がアーリア人として「健康な子」を産み、牧歌的家庭で子どもが健康に育つこと以上には、幼児教育に積極的に関与しようとはしなかった。むしろ、幼児教育関係者がナチズムの意向を先取りするかたちで、幼児教育の内容を変形し、フレーベルの教育思想も換骨奪胎してナチズムに適合させていった。

先行研究としては、ナチズムと幼児教育に関しては、旧東独の Gottfried Uhlig (1986)、旧西独の Wilma Grossmann (1987)、統一後の Manfred Berger (1986/2005) のそれぞれの論考、ナチズムのフレーベル解釈では Helmut Heiland (2003) の論考を主として参考にした⁽⁴⁾。

1. ナチズムの教育思想

1933年に全権を掌握するヒトラーは、『わが闘争』（第二部1926年）で次のように述べていた。「民族主義国家の教育は…まず第一に身体的訓練に重点を置き、次に心的に、最後に知的価値の促進に重点が置かれる。女子教育の目標は、何と云っても母となることである」⁽⁵⁾。一に体育（Körper）、二に徳育（Seele）、三に知育（Geist）そして「産む性」としての女子教育がヒトラーの教育観である。

ナチズムは身体的教育（体育）を最も重視した。男子は将来の兵士として、女子は将来の子を産むものとして。そして軍隊を最高の学校と見なした。少年団やヒトラー・ユーゲント、少女団（10-14歳）や女子青年団（14-18歳）は軍隊式に組織された。

心的教育（徳育）は、全ての青少年を民族共同体（Volksgemeinschaft）へと教育することを目的とする。民族共同体とは、人種学、遺伝学を基盤に支配民族としてのドイツ民族の優秀性、反ユダヤ主義、反共産主義（後には反自由主義）を標榜する。この教育を第三帝国内務相 Wilhelm Frick は、ドイツ国民教育（deutsche Nationalerziehung）と呼び、国家への奉仕を徳育の第一とした⁽⁶⁾。ヒトラーは『わが闘争』で、将来の兵士となる第三帝国の青少年にとって、誠実、献身、意思力、決断力、責任感と並んで愛国心の重要性を説き、人種的意識や人種的心情を教育活動のなかで目覚めさせ、「血の単一性の必要と本質について最終的な認識を得ないで学校を出してはならない」と述べる⁽⁷⁾。ナチズムにおいて「個」は、「全体」のなかに埋没する。

ヒトラーは、知的な教育は青少年を墮落させるとして軽視した。その結果、体育やヒトラー・ユーゲントなどによる屋外活動が重視されたが、基礎的学力は低下した。例えば、ナチ教員同盟のエーバーマンシュタット地区長官は1942年の学力検査について次のように述べる。

「計算、地理、歴史などの知識の検査結果は、まったく惨憺たるものであった。国民的高揚の直後ということで、学童たちは…読み書き計算をまず第一にきちんと習うところまでいってないのではないかと思われる」⁽⁸⁾。ヒトラーは『わが闘争』で、「その95%までを若い頭脳が必要とせず、それ故また忘れてしまうようなことは、

一般的に詰め込むべきでは無い」と述べる⁽⁹⁾。例えば、フランス語などは10万人の学生うち、2千人の学生が将来利用するに過ぎず、多くの学生が貴重な時間を無駄にしていると非難している⁽¹⁰⁾。ただし、ローマ史などのドイツ民族の優秀性を教える歴史教育などは、徹底して教えることを求めた。

知育の軽視は、高等教育の分野まで広がり、1933年の「大学の学生数の過剰を排する法」によって大学入学が制限された。その結果、アビトゥア合格者のうち男子は二分の一、女子は七分の一しか入学できなくなった。同法は、大学生全体の10%しか女子の入学を認めなかったという⁽¹¹⁾。

ヒトラーは働く女性を否定した。1933年以降、学校では女性が校長になることは消えていき、女医も露骨に差別された。36年以降は、女性の判事や検事は見られなくなった。そしてアーリア人の血統を重んじて出産することが、補助金その他で奨励され、女性は4人の子どもをもって初めて一人前とされ、4人以上は銅、6人以上は銀、8人以上は金のドイツ母親名誉十字章が授与された⁽¹²⁾。そして「糸巻きの音にまじってメルヘンが語られ、古い格言が話され、民族舞踊が踊られ、民謡が歌われる」⁽¹³⁾ような家庭が理想とされた。子を産み、家庭を築く女性を育てる女子教育をナチズムは重視した。幼稚園はあくまで家庭の教育を補うに過ぎない位置づけだった⁽¹⁴⁾。第三帝国内務相フリックは、「婦人解放の用語はユダヤ人的発想だけが見つかる言葉であり…(ドイツ婦人は)決して解放されてはならない」と述べた⁽¹⁵⁾。

このようなナチズムの教育を幼児教育関係者は、積極的に実現しようとした。

2. 幼児教育の「強制的同質化」 (Gleichschaltung)

教育の「強制的同質化」は、教育の思想、内容、制度の全てをナチズムの支配下に従属させることを意味する⁽¹⁶⁾。

教育学者も、ワイマール期の自由主義的教育思想から国家社会主義賛美の方向に移り変わっていく。例えば、フリットナーは、進歩主義的教育を否定し、シュプランガーは、ヒトラーを讃えた⁽¹⁷⁾。

ミュンヘンのドイツ幼稚園はその100周年誌(1940)において、「教育が国家社会主義ドイツそのものにおいてと同じように、幼稚園も、本質的に政治的な教育手段である。幼稚園において、国家社会主義的人間指導の全ての原則が具体化される」と謳った⁽¹⁸⁾。国家社会主義公共福祉局(Nationalsozialistische Volkswohlfahrt=NSV)は、1933年にNSDAP(国家社会主義労働者党=ナチス党)の福祉部門として設置された。やがてナチによる軍需産業の振興と大戦の勃発は、第三帝国の女性労働の必

要性を増した。

NSV(国家社会主義公共福祉局)は、乳幼児の保育需要に応えるべく、保育と保姆養成の全てを統括していく。Gau Kurhessen地方のNSV長官だった医師Richard Benzing。Benzingは「若い男子は、将来的にはドイツの兵士となる。若い女子はドイツの母となる」⁽¹⁹⁾、「国家社会主義的な意味で育てられた子どもは、今までの全ての子どもよりも、健康で、強くて、美しく、有能で、信頼できる」⁽²⁰⁾と述べ、幼児を民族共同体の成員へと育成することを宣言した。

1930年代初頭、ドイツの就学前施設は多様。幼稚園(Kindergarten)、託児所(Hort)、託児室(Kinderkrippe)、学童保育施設(Heim)など⁽²¹⁾。幼稚園は、例えば1937年のWürttembergでは、267の幼稚園のうち宗派立53%、公立26.6%、NSV6.7%、他は団体や個人だった⁽²²⁾。NSV(国家社会主義公共福祉局)は、当初は農繁期幼稚園(Erntekindergarten)を中心に、次第に他の就学前施設を統制していく。ナチス党によって資金も豊富で、夜間や祝日の保育、場合によっては自宅での出張保育も行ったNSVは、表1のように乳幼児死亡率(とくに母子家庭)を減少させ、ドイツ国民の支持を得ていった⁽²³⁾。

表1: 乳児死亡率の推移⁽²⁴⁾

Jahr	Totgeborene auf 1000 Lebend- und Totgeborene	Nichtehelich Lebendgeborene auf 1000 Lebendgeborene	Im ersten Lebensjahr gestorbene Säuglinge (ohne Totgeborene) auf 1000 Lebendgeborene	Im ersten Lebensjahr gestorbene nichteheliche Säuglinge (ohne Totgeborene) auf 1000 nichtehelich Lebendgeborene
1928	31,1	122	89	136
1929	30,6	121	96	144
1930	30,9	120	84	124
1931	30,2	118	83	123
1932	29,4	116	79	116
1933	28,5	107	76	114
1934	26,5	85	66	105
1935	25,5	78	68	111
1936	25,5	77	66	103
1937	24,0	77	64	103
1938	23,0	76	60	96
1939	22,7	77	60	98

a) Gebietsstand: 31. 12. 1937.
Quelle: Bevölkerung und Wirtschaft, S. 107f, 113; Stat. Handbuch von Deutschland, S. 47 (Totgeborene 1939); Stat. Jb. f. d. Dt. Reich, 1941/42, S. 90 (Säuglingssterblichkeit 1939-40); S. 68 (Nichtehelich Lebendgeborene 1939).

例えば、1938年には、チューリンゲン地方の尋常幼稚園(Dauerkindergarten)の55.4%、農繁期幼稚園の94.9%がNSV(国家社会主義公共福祉局)によって担われた⁽²⁵⁾。1940年には尋常幼稚園数が9,814園、農繁期幼稚園数が7,211園となる⁽²⁶⁾。シュレーゲンのNSVの幼稚園は、1934年は5園、35年は189園、36年は442園と増加している⁽²⁷⁾。ナチズムは宗派立や私立の学校を抑圧していったが、幼稚園に関しては徹底はしなかつ

た⁽²⁸⁾。ユダヤ人の子どもは幼稚園への登園を禁止され、公的な遊技場の利用も禁止された⁽²⁹⁾。

教育の同質化は、教員組織にも及び、教員はNSLB(国家社会主義教員連盟)に所属したが、1936年の時点でドイツ全教員の97%がNSLBに、そして32.1%がナチス党員になった(一般公務員に占めるナチス党員は17%)⁽³⁰⁾。1937年5月には、NSLB以外の教員連盟が禁止されたことから、翌1938年にはマーレンホルツ=ビューローたちによって結成(1863年)されたDFV(ドイツ・フレーベル連盟)も解散した。

ナチズムによる軍事大国化は、表2のように労働力の需要増となり、兵役のために工場を去る男性に代わって女性労働の必要性を促した。例えばスターリングラード戦敗北後の1943年1月、大管区長ザウケルは女性労働総動員を試み、17歳から45歳の女性を戦時経済体制に組み込もうとした⁽³¹⁾。中村は、女性労働は結果的にはそれほど増加しなかったものの、「女子を家庭に留め、母親としての使命を全うさせようとするナチス党の従来の立場をそのまま維持することができなくなった」と述べる⁽³²⁾。

女性労働力の需要増は、保育の需要増と保育者不足となってあらわれた。NSV(国家社会主義公共福祉局)は既存の専門学校を取り込み、ゼミナールを設けて幼稚園教員や託児所等保母養成に取り組んだ。生徒は16歳以上でアリア人の血筋をもち、BDM(ドイツ女性同盟)のメンバーであることが求められた。寄宿舎で2年間、共同生活をしながら保育現場の実習が重視され、民族学、遺伝学や人種学など国家社会主義的価値観に合う教科が講義された⁽³⁴⁾。彼女らは、幼児の保育を担うだけでなく、母親たちに民族共同体の思想を浸透させる役割も

期待された。

NSVゼミナールでは、民族主義的教育思想としてフレーベルが語られたが、これは、後述するように、幼児教育関係者がナチズムにフレーベル思想を適合させていった結果である。

3. ナチズム下の幼児教育の内容

ナチズムは体育を重視し、その次に徳育を、そして知育は軽視した。『わが闘争』を見るかぎり、ヒトラーが子どもの血統や健康以外に幼稚園教育に特別に期待している様子は伺えない。当時の日本の文部省も『幼児保育に関する諸問題』(1942)のなかで、「ナチスが幼稚園に於て特に心掛けているのは保健である」とし、①健康診断、②給食、③清潔、④体操などの身体訓練をあげている⁽³⁵⁾。後述するが、ナチズムが期待する以上に、幼稚園関係者は生き残りをかけて、積極的にナチズムの教育に自らを適合させようとした。

まずは体育。「芯から健康な身体の鍛錬」(Heranzüchten kerngesunder Körper)を幼児期からはかり、将来の兵士と兵士を産む母を育成することが目指された。体操や遊び(ボール遊び、かけっこ等)が賞賛され、「自然の治癒力」を利用した屋外での日光浴や乾布摩擦などが推奨された。幼稚園児は、「それによって足が自由になり、自然な機能で発達できるから」、出来るだけ大地では裸足でいることが良いとされ、「風邪の心配は、ここでは(大抵はだいたいの場合)根拠がない。子どもは、系統的に自由な空気に慣れたなら、それが風邪に対する最善の防御である。それでも風邪をひくのは、あせ

表2：1936年を100とする労働力の需要増⁽³³⁾

Beschäftigte Arbeiter 1936 = 100

Zeit	Gesamte Industrie	Produktionsgüterindustrien	Investitionsgüterindustrien ohne ausgeprägte Saisonbewegung	Verbrauchsgüterindustrien	Bergbau	Eisen- und Metallgewinnung	Stahl- und Eisenbau	Maschinenbau	Fahrzeugbau	Werkstoffverfeinerung und verwandte Eisenindustriestricke	Eisen-, Stahl- und Blechwarenindustrie	Metallwarenindustrie	Elektroindustrie
1929	101,8	95,7	94,8	111,2	136,9	90,1	—	84,4	—	—	—	—	107,9
1932	60,5	48,8	45,2	78,5	84,3	47,8	27,2	44,3	31,5	52,5	62,1	66,2	55,1
1933	67,0	56,5	50,7	82,7	86,7	55,0	34,3	49,6	48,5	60,8	69,3	69,2	60,0
1934	84,6	78,2	71,2	94,2	92,1	74,4	56,6	70,4	74,9	78,9	84,4	81,2	82,7
1935	92,4	89,8	87,3	96,5	95,5	88,8	81,1	87,4	91,0	90,3	94,0	90,6	92,8
1936	100,0	100,0	100,0	100,0	100,0	100,0	100,0	100,0	100,0	100,0	100,0	100,0	100,0
1937	108,2	108,6	112,4	106,7	112,3	109,2	112,3	115,0	108,7	109,5	110,1	108,6	117,5
1938	115,9	119,0	123,5	109,1	119,8	117,7	127,7	128,0	120,0	119,7	115,4	114,1	131,6
1938 Januar	107,0	106,2	117,3	107,0	118,9	112,1	116,6	121,1	112,5	114,0	113,2	112,2	124,6
1938 Juni	115,6	118,7	122,6	108,9	120,7	116,9	127,3	127,2	119,9	120,1	115,6	113,6	130,6
1938 Nov.	121,6	126,9	129,7	112,1	119,5	123,4	135,9	134,4	127,1	123,5	117,7	117,3	138,9
1939 Januar	118,4	120,7	132,1	112,6	120,4	125,2	139,2	137,4	129,3	124,6	118,3	117,0	139,5
1939 Juni	125,1	130,3	137,9	115,7	121,1	128,1	149,3	145,1	135,1	126,2	118,0	119,1	145,3

びっしょりの靴下や、きつい靴をはいて座っていたに違いない⁽³⁶⁾とされた。

子ども集団の遊びでは規律を用いた、「命令と従属」(Führertum u. Gefolgschaft) が重視された。集団遊びはやがて軍事化していく。雑誌 Kindergarten (1940) には「私たちの子どもは戦争を体験する」と題して、保育者と子どもによって為される次のような「戦争ごっこ」が描かれている。

すばやくおばちゃま (Tante) は、子どもたちに制服を着せた。それから、兵営で教練に参加した。男の子 Rolf には、もう指揮官の資質が認められる。彼は、大尉として閲兵し…今や彼らはもはや兵士遊びをするのではなく、いまや兵士そのものである。部屋ではその間、数人の子どもが Tante と一緒に、砲兵陣地をつくる。礎石は、半月に壁に積み重ねられ…陣地では兵士が、簡単に作られた大砲に、紙の砲弾を玉込めする。陣地の近くの村は閉鎖される。個々の家はすでに一緒に崩されている。もう一方の机には、飛行機がある。大広間では、二三の飛行機が飛び立つのを待っている。兵士が飛行機を迎撃するために兵営から来る⁽³⁷⁾。

また、けんかも奨励された。「すでに4歳で遊びで邪魔されず、必要なら殴りかかることができるような子は、民族主義の隊列において戦士となることが約束された。民族は、彼の戦闘の資質を、名誉と所持のための闘いにおいて計算することが出来た⁽³⁸⁾。園児たちは、将来の兵士たるべく身体を健康にされ、その遊びも暴力礼賛・軍事化されていった。

次に徳育。幼稚園児は、①ヒトラーへの忠誠につながる「命令と服従」の指導者原理 (Führenprinzip)、②民族共同体意識と愛国心を目標に教育された。

まず①「ヒトラーへの忠誠」：質素な食事でも不平を言わずに食べることは、戦争に貢献することだと唱えられた⁽³⁹⁾。幼稚園では毎朝、次のような祈りが教師によって捧げられた⁽⁴⁰⁾。

私たちの総統を私たちは愛する
私たちの総統を私たちは讃える
私たちの総統に私たちは従う
そうして私たちは大人になる
私たちの総統を私たちは信じる
私たちの総統のために私たちは生きる
私たちの総統のために私たちは死ぬ
そうして私たちは勇士になる

怪我をしても泣かない人を
総統は喜ぶ

勇気があって、勇敢な人を
総統は愛する
他人をけなしたり悪し様に言う人を
総統は悲しむ
よい仲間意識をもつ人を
総統は愛する

ヒトラーの誕生日には、特別に盛装した園児たちが彼の肖像の前で敬礼した。またヒトラーの肖像が各家庭に配られた。増淵も述べるように「子どもは総統に捧げられるべき存在だったのである⁽⁴¹⁾。

次に②「民族共同体意識と愛国心」：幼稚園児は、典型的な「ドイツ (ゲルマン) の性格と態度」へと教育されねばならなかった。例えば、適応力、共同体感情、従順、勤勉、協調性、規範意識、規律、清潔さ、責任意識、行動力、権威に対する従順さと畏怖、祖国や祖国の総統アドルフ・ヒトラーへの愛、儉約、自己犠牲など⁽⁴²⁾。だから幼稚園では、絵本や人形劇、メルヘンなどでドイツ民族の優秀性と人種イデオロギーが語られた⁽⁴³⁾。例えば『シンデレラ』は、人種的に純潔な乙女と異人種の継母の争いとされ、シンデレラを助けた王子は人種的に直観を保持していたとされた⁽⁴⁴⁾。クリスマスもゲルマン民族の祭典とされた。

日々行われるハーケンクロイツ旗の掲揚と回収は次のように位置づけられた。「羽ばたいている旗は、呼びかけであり責務であり…仲間意識を目ざませ、任務に就く人間の目と心を、民族共同体の偉大な目的へと導く。旗の掲揚は、新たな生活様式であり、戦闘意識の形成は信仰告白である。訓練された外的な態度は、目覚め再発見した北方人種の魂の全ての内的態度の必然的発露である…旗の掲揚は、国家社会主義的態度のトレーニングであり、共同体の訓育形式である」と⁽⁴⁵⁾。

戦争に協力する象徴的な行為として園児による以下の様な金属品回収も行われた。ニッケル製の貯金箱やアルミのおもちゃなどを園児は自宅から運んできた。そして市街をパレードしてナチス党に寄贈した。その様子を雑誌 Kindergarten は次のように記している。

日々、新たな驚きがあった。赤いほっぺと輝く瞳で子どもたちは早朝にやってきては、大小のタブレット、錫のコーヒーポット、ニッケルの卵立てや飲み物やお酒のコップ、ナプキンリング、紅茶碗の皿そして他の日用品を、腕や手にもってきた。

4歳の幼児は、宝物をもってきた。それは、その子が、母が言ったけど、もう7時には手に持っていて、目を輝かせながら喜んで持参したものだ、その子は、引き渡しの時間をほとんど待てなかったのだ。このような現象によって実現したのは、やっと3歳かそこらの最も幼い子でも、組織化されたことである。蹄鉄、

重いニッケルの貯金箱、金属のおもちゃ、錫の兵隊さん、アルミニウムなどたくさん、子どもの宝物が、喜んで差し出された。時計の箱、ドアの鉤、ドアの取っ手、水道の栓が集められ、不足するものは多くなかった。そして、子どもたちは両親の同意無くして、ベッドの金の玉を取り外した…子どもたちは当初、多くの金属が必要だと急かされたが、そのことで子どもたちは、戦争に使う榴弾や大砲など知るべき、興味深いことについて理解出来た⁽⁴⁶⁾。

ドイツファシズムでは、幼稚園関係者はナチズムの意向を「付度」して、子どもを将来の兵士として身体を鍛え、ヒトラーへの忠誠と、ドイツ民族の優秀性を唱える民族共同体意識へと教育していったのである。したがって幼稚園の指導原理であるフレーベル主義も、ナチズムに適合するように換骨奪胎されていく。

4. 国家社会主義者のフレーベル理解

Heiland は、第三帝国のフレーベル研究を「ナチズムのイデオロギーのためにフレーベルを明白に、徹底的に利用したことを物語っている」と語る⁽⁴⁷⁾。ドイツ・フレーベル連盟の機関誌 Kindergarten は、フリードリヒ・フレーベルをヒトラーのパイオニアと讃えた⁽⁴⁸⁾。Petersen は1942年、「フリードリヒ・フレーベルドイツの偉大な教育者—」(Friedrich Fröbel. Deutschlands größter Erzieher) のなかで国家社会主義の先駆者としてフレーベルを描いている。

ミッツエンハイムによると、ペーターゼンのこのような働きかけによって、大学の養成機関にフレーベル幼稚園が接続し、幼少連携に道が拓け、フレーベルの家屋等が保存されたと位置づけている⁽⁴⁹⁾。また、Heiland によれば、第三帝国のフレーベル研究により、フレーベルの遺稿（とくに書簡）などの蒐集が進み、フレーベル研究が進展したとも言う⁽⁵⁰⁾。ナチズムの教育思想の先駆者としてフレーベルを位置づけることによって、フレーベルの遺跡や遺稿が保存され、第二次大戦後のフレーベル研究の発展につながったと解釈も出来るが、決してそのことでナチズムが礼賛されるものではない。

ナチズム期のフレーベル研究は、おおよそ次の三点に集約される。①フレーベルが1813年の対ナポレオン解放戦争に従軍したことを民族主義的精神の発露として賛美し、カイルハウ学園などの教育内容から、彼が身体教育や体操、運動遊戯などを通して将来の兵士育成の教育をしたとしたこと、②彼の神、自然、人間の調和を説く球体法則や部分的全体の思想は、個と全体の相互の尊重ではなく、個を捨てて全体に奉仕する民族共同体思想と同じとしたこと、③フレーベルは血の血統を重んじる反ユダヤ主義者であったとしたこと。ハイランドは、プリュー

ファーがフレーベル第二の妻ルイゼがユダヤの出自でないことを証明するために無駄な努力をしたと断じている⁽⁵¹⁾。そのようなフレーベル研究者として、ここでは Heiland の研究⁽⁵²⁾に依拠しながら、Hans Volkelt、Peter Goedel、Fritz Halfter の三名を取り上げる。

Volkelt (1886-1964) は、ライプチヒ大学で発達心理学を学び、大学や教員養成専門学校で教えた。1932年に NSDAP (ナチス党) に入党し、1933年から DFV (ドイツフレーベル連盟) 議長となり機関誌 Kindergarten の責任者となるが、1938年には DFV を解散し、NSLB (国家社会主義教員連盟) に統合した。機関誌の責任者も辞した。彼は30年代、大学で正教授となりたかったが、テオドール・リットに反対されてなれなかった⁽⁵³⁾。このことで一層ヒトラーとナチズムにすり寄っていったことが推測される⁽⁵⁴⁾。

Volkelt は、フレーベルが解放戦争に従軍したことを高く評価し、カイルハウ学園などでは、フレーベルは子どもたちを戦争遊戯や体操を通じて、「軍隊教育としての身体教育によって肉体的に鍛えた。フレーベル、人間教育者は、核心において民族教育者である…民族の教育者は、血に特有な、同類に生きる民族を、民族的国家を、民族や国家に結びついた家庭を、そして—なによりも家庭、民族、国家を通じて—個々人を、神的な世界の根源の生きた示現、いな、行為の示現と見なす」と門弟 Goedel の学位論文の序文に記した⁽⁵⁵⁾。

彼はフレーベルの球体法則を、個を捨てて全体や民族に奉仕する民族主義教育の基盤とし、幼稚園における運動遊戯や集団遊戯を軍事訓練の初歩 (Vorform) と位置づけた。

Heiland は、個人と民族や国家はフレーベルにおいては同価値なのに、国家社会主義者は個の価値や権利を消し去ったと批判している⁽⁵⁶⁾。

Goedel (1938) も、フレーベルの従軍生活を賛美して次のように述べる。

解放戦争の危機、戦闘への熱血、それらは、フレーベルを解くことなく結びついた運命共同体としての民族に導き、彼のなかに、民族主義や共同の歴史的運命を基盤とする民族的生成 (Volkwerdung) の考えを引き起こすものであったが、それら無くしては、後年に一般ドイツ教育舎や、一般ドイツ幼稚園がドイツ民族に教育課題を提示することは困難だったろう。最初のドイツの民族戦争は、フレーベルのなかに、一つの国家的仕事としての民族教育という考えを提供しただけでなく、彼と二人の間を、政治的な男の結びつきへと形成し、強めた。この結びつきは、戦争の全てのエネルギーを、フレーベルの理念の実現へと変えさせるものであった…フレーベルは、ここで、個々の責務と共同体の課題、自己責任のある行動力、絶対的な

服従と厳しい規律の繋がりを明瞭にした…フレーベルの教育学は、兵營的生活原則によって規定される…だから、カイルハウで生徒達は、ゲルマン主義の理念のもとで、共同体の生活法則へと教育される⁽⁵⁷⁾。

国家社会主義たちは、フレーベルの教育をまた、兵營の原則によって貫かれたものであり、民族共同体に奉仕するものとして捉えた。Goedelによると、フレーベルの球体法則や部分的全体の思想も、共同体や国家のために自分を忘れて奉仕する行為につながるものであり、彼は個を尊重するドイツ啓蒙主義を否定したと言う⁽⁵⁸⁾。

確かにフレーベル自身の言葉には、ナチズムが喜ぶような国家主義的要素がある。例えば1820年カイルハウで書いた「ドイツ民族に寄せる」では次のような内容がある。「国家は、その成立と存続との基礎と目的によって…個人の絶対の服従、負担した義務に対して厳しい無条件の遵法、全体の存続のために全体への個人の忠実な献身、全体に対する個の完全な犠牲を要求し、欲する」⁽⁵⁹⁾。

しかしながら彼は、「全体に対する個の無制限な従順と、自由な追従の間には、ただ動揺、疑念、不和、争い、闘争がある」⁽⁶⁰⁾として、個と全体は同価値であり、全体に対する個の従順と、自由な追従は相互に繰り返されるものであることを述べている。国家社会主義者は、フレーベルの言説のなかで、ナチズムにとって都合のよいところだけを牽強付会していると言える。

Halfter は、シュプランガーの影響を受けて1921年に学位論文「フリードリヒ・フレーベル—彼の内的な成長1782-1811—」を著している。当初彼は、生命合一など、フレーベルの神秘主義、哲学的思想の研究を行い政治的発言はあまりみられなかったが、ヒトラーが政権掌握後の1938年「幼稚園者フリードリヒ・フレーベルの理念世界」のなかで「国家社会主義の自由運動、それは、つまり、固有な意味での教育運動である。私たちが、教育の守護神フレーベルの特徴を、アリア人的世界観との関係から明白にしようとした事実は、私たちが、アドルフ・ヒトラーの教育運動のなかに、フレーベルの真の教育精神の生きたデザインを認めることを十分に示唆するだろう」⁽⁶¹⁾と述べる。

フレーベルをアリア人の血筋を守る民族主義者と唱えた Halfter は、フレーベルを反ユダヤ主義者と言う。彼は、1831年8月18日にカイルハウに宛てた書簡でフレーベルが、「ランゲタールとミッデンドルフは、おそらくベルリン時代から、如何に私に、つねに何らかの非常に不愉快なことが、ユダヤ人家族との関係においてあったかを知っている」⁽⁶²⁾と述べている箇所を取り上げ、フレーベルを反ユダヤ主義としているが、Heilandによるとこれは全くの意図的な牽強付会であると言う⁽⁶³⁾。

Halfter は、フレーベルの幼稚園が自由教団や女性協

会などのリベラルな運動団体によって支持されたのも、ユダヤ人の陰謀と説く⁽⁶⁴⁾。そして彼は、フレーベルは精神の自由を唱えるロマン主義者ではなかったとまで言う⁽⁶⁵⁾。

彼もフレーベルが解放戦争に従軍したことを賛美し、これは全体のための個の犠牲という「プロイセン的精神」を示すものであり、この精神はいま、世界戦争のリーダー（ヒトラー）に信託されていると述べる⁽⁶⁶⁾。

Volkelt、Goedel、Halfterなどに共通することは、国家社会主義においては、フレーベルの個を尊重する自由主義的教育思想が換骨奪胎され、個を犠牲にする民族共同体思想とされ、フレーベルの遊びや自由な身体教育が兵士教育への前段階にされ、フレーベル自身が血の血統を守る反ユダヤ主義者とされたことである。

○おわりに

既述したが、ナチズムは当初、国民学校以上の教育においては、強制的同質化をはかり民族主義的教育へと監視の目を光らせたが、幼児教育に関しては人種の遺伝的原則による出産以外はあまり関心を示さなかった。自然のなかで健康に育てばそれでいいとされた。だが、Volkelt みられるような国家社会主義者たちが、ナチズムの意図を幼児教育にも適合させ民族主義的幼児教育を行い、フレーベルをも民族主義的に解釈していった。その背景には軍需産業の振興に伴う女性労働力不足と保育需要に応えたNSV（国家社会主義公共福祉局）の活躍があった。ミツツェンハイムも、このような動向によって、幼児教育の専門家が転向させられ、「組織的な国家社会主義の幼児教育」が新たな目標となったと述べている⁽⁶⁷⁾。

ただし、そうすることでフレーベルの遺産が保護され、戦後のフレーベル研究の発展に繋がったことは事実であろう。もっともそう述べることは、ヒトラーは失業を無くし、アウトバーンを整備したと言うに等しく、何らナチズムが合理化されるものではない。

大戦後 Volkelt は、当初の心理学研究を行い、Bietigheim で教授として暮らした⁽⁶⁸⁾。

註：

- (1) 代表的な研究書として、例えば、田代尚弘(1995)『シュプランガー教育思想の研究—シュプランガーとナチズムの問題』風間書房、坂越正樹(2001)『ヘルマン・ノール教育学の研究』風間書房、増渕幸男(2004)『ナチズムと教育』東信堂、對馬達雄(2006)『ナチズム・抵抗運動・戦後教育』昭和堂などをあげることができる。
- (2) 多田鐵雄(1938)「ナチス幼稚園保姆養成所の教案」

- 『幼児の教育』38(4)
多田鐵雄 (1938)「ナチス保姆養成の教案」『幼児の教育』38(5)
- (3)ミツェンハイム 荳司泰弘約 (1933)「ナチス時代の幼稚園」『山口大学教育学部研究論集』第43巻第三部
- (4)Gottfried Uhlig (1986): Vorschulerziehung und Kindergärten in den Jahren der faschistischen Herrschaft, IN: Beiträge zur Geschichte der Vorschulerziehung.
Wilma Grossmann (1987): Kindegarten=Eine historisch-systematische Einführung in seine Entwicklung und Pädagogik, Weinheim und Basel.
Manfred Berger (1986): Vorschulerziehung im Nationalsozialismus. Recherchen zur Situation des Kindergartenwesens 1933-1945, Weinheim.
Helmut Heiland (2003): Fröbel im Dritten Reich- Zur Fröbelrezeption im Nationalsozialismus, IN: Fröbelforschung heute, Würzburg.
- (5)Hitler, Mein Kampf = eine kritische Edition Bd.2. (2016), Hrsg.v.Christian Hartmann usw., Im Auftrag des Instituts für Zeitgeschichte München-Berlin, S.1057. (邦訳書：平野他『わが闘争2』黎明書房1961、209頁)。
- (6)梅根悟監修(1977)『ドイツ教育史Ⅱ』講談社、113頁。
遠藤孝夫 (2017)「ナチズム体制下におけるヴァルドルフ学校の基礎的研究」『岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』16号、43頁。
- (7)Hitler, Mein Kampf, a.a.O., S.1087. 邦訳書、前掲、222頁。
- (8)H・ホッケ他、山本尤他訳 (1984)『ヒトラー政権下の日常生活』社会思想社、166頁。
- (9)Hitler, Mein Kampf, a.a.O., S.1065. 邦訳書、前掲、213頁。
- (10)Vgl.Ebenda.S.1067. 同書、214頁参照。
- (11)木村靖二他 (1997)『世界歴史大系 ドイツ史3』山川出版、248頁。
- (12)増淵幸男 (2004)『ナチズムと教育』東信堂、65頁。
- (13)Gottfried Uhlig, a.a.O.,S.364.
- (14)多田鐵雄 (1938)「ナチス保姆養成の教案」『幼児の教育』38(5)、63頁。
- (15)ミツェンハイム、荳司泰弘約 (1993)「ナチス時代の幼稚園」『山口大学教育学部研究論集』第43巻第三部、254頁。
- (16)梅根悟、前掲、114頁。
遠藤、前掲、43頁。
- (17)江藤恭二他 (1962)『現代教育史』明治図書、255頁。
- (18)Festschrift zur Hundertjahrfeier des deutschen Kindergartens (1940), Hrg.v. Reichswalter des Nationalsozialistischen Lehrerbundes Gauleier Wächtler, München, S.2.
- (19)Richard Benzing (1942): Grundlagen der körperlichen und geistlichen Erziehung des Kleinenkindes im nationalischen Kindergarten, Berlin, S.40.
- (20)Ebenda, S.8.
- (21)Gottfried Uhlig, a.a.O.,S.359.
- (22)Wilma Grossmann, a.a.O.,72.
- (23)Ebenda, S.71.
- (24)Harald Focke (1979): Alltag unterm Hakenkreuz, Rowohlt.S.125より
なお、表の縦軸左側より「年」「出生児1000人中の死産」「出生児1000人中の非嫡出子」「出生児1000人中の誕生1年以内の死亡児」「非嫡出児1000人の誕生1年以内の死亡児」。
- (25)Gottfried Uhlig, a.a.O.,S.358.
- (26)ミツェンハイム、前掲、258頁。
- (27)Grossmann, a.a.O.,75
- (28)Manfred Berger (2005): Zur Kindergartenpädagogik im Nati-Deutschland (1933-1945) -unter besonderer Berücksichtigung der Fachzeitschrift Kindergarten (1933-1942), IN: Das Kita-Handbuch (インターネットから取得したため頁を特定不能)。
- (29)Gottfried Uhlig, a.a.O.,S.367.
- (30)遠藤、前掲、44頁。
- (31)Harald Focke, a.a.O.,S.164.
- (32)中村一浩 (1995)「第二次世界大戦の勃発とナチス体制下の労働力動員1939/1940年」『北星論集(経)』32号、184頁。
- (33)Harald Focke, a.a.O.,S.136.
- (34)Gottfried Uhlig, a.a.O.,S.370.
ナチズムの幼稚園保姆養成所の内容については、多田(前掲)が詳しい。
- (35)文部省教育教育調査部 (1942)『幼児保育に関する諸問題』(『大正・昭和保育文献集』12巻、日本図書センター、2010年)81頁。このなかでドイツの事情は、「諸外国における就学前教育」として述べられているが、記述したのはおそらく多田鐵雄であろう。
- (36)Kindergarten 1935, Organ der Reichsfachschaft 7 sozial-pädagogische Berufe im NSLB. Zeitschrift für Erziehungsarbeit der Kindergärtnerin und Jugendleiterin, S.252. 引用にあたっては、Manfred Berger (2005), a.a.O., (頁指定不能)を参照した。
- (37)Kindergarten 1940, a.a.O., S.83. 引用にあたっては、Manfred Berger (2005)を参照した。
- (38)Kindergarten 1939, S.66. 引用にあたっては Grossman, a.a.O.,S.69を参照した。
- (39)Kindergarten 1940, S.189. 引用にあたっては、Manfred

- Berger (2005)を参照した。
- (40)Richard Benzing (1942): Grundlagen der körperlichen und geistlichen Erziehung des Kleinenkindes im nationalischen Kindergarten, Berlin.S.43
- (41)増渕、前掲、38頁。
- (42)Manfred Berger (2005)。
- (43)Gottfried Uhlig, a.a.O.,S.363
- (44)リン・H・ニコラス、若林訳 (2018)『ナチズムに囚われた子どもたち (上)』白水社、116頁。
- (45)Kindergarten 1937, S.71. 引用にあたっては、Manfred Berger (2005)を参照した。
- (46)Kindergarten 1940, S.83. 引用にあたっては、Grossmann, a.a.O.,S.68を参照した。
- (47)Helmut Heiland, a.a.O.,S.228.
- (48)Kindergarten1933 : 197. 引用にあたっては、Manfred Berger (2005)を参照した。
- (49)ミツェンハイム、前掲、257頁。
- (50)Helmut Heiland, a.a.O.,S.220.
- (51)ebenda.S.215.
- (52)ebenda.S.214 ff.
- (53)増渕によると、リットはライプチッヒ大学長としてナチズムに厳然と異を唱え、ナチズムの学生の脅迫にも屈しなかったという (増渕、前掲、184~185頁)。そのようなリットだからこそ、Volkeltのような軽佻なナチス礼賛者を正教授にしなかったのであろう。
- (54)増渕によると、反ユダヤ主義の立場に立たない研究者は「白いユダヤ人」と呼ばれ、ユダヤ人との私的な交際が発覚すると教授職を追われたという (増渕、前掲、17頁)。したがって、リットに毛嫌いされればされるほど、Volkeltがナチズムにすり寄っていたことが推測できる。
- (55)Peter Goedel (1938): Friedrich Fröbel als Vorkämpfer deutscher Leibeserziehung, Leipzig, S.iv, zit. nach Helmut Heiland, a.a.O.,S.221
- (56)Helmut Heiland, a.a.O.,S.217.
- (57)Peter Goedel, a.a.O.,S.29-35, zit. nach Helmut Heiland, a.a.O.,S.221
- (58)ebenda, S.40, zit. nach Helmut Heiland, a.a.O.,S.224
- (59)Hans Zimmermann (1914): Fröbels kleinere Schriften zur Pädagogik. Leipzig, S.136f. (邦訳『フレーベル全集1』玉川出版1977、360頁)。
- (60)ebenda, S.173, (邦訳、前掲、429頁)。
- (61)Fritz Halfter (1938): Die Ideenwelt des Kindergartens Friedrich Fröbel. In: Intetaz. Zeitschrift f. Erziehung 7, S.15, zit. nach Helmut Heiland, a.a.O.,S.233
- (62)Bruno Gumlich, Hrsg., (1935): Friedrich Fröbel an die Frauen in Kailhau, Weimar, S.29, zit. nach Helmut Heiland, a.a.O.,S.234.
- (63)ebenda. (Helmut Heiland).
- (64)Fritz Halfter (1940): Friedrich Fröbels Platz, innere Werden und eigentliches Wollen, Dortmund, S.67, zit. nach Helmut Heiland, a.a.O.,S.234.
- (65)Vgl., Helmut Heiland, a.a.O.,S.232.
- (66)Vgl., Fritz Halfter (1939): Friedrich Fröbels pädagogische Leistung. IN: Die deutsche Schule 43, zit. nach Helmut Heiland, a.a.O.,S.233.
- (67)ミツェンハイム、前掲、253頁。
- (68)Vgl., Ernst Klee: Das Personenlexikon zum Dritten Reich 2007。

※本稿執筆にあたっては、上坂元絵里氏 (お茶の水女子大学附属幼稚園副園長)、松島のり子氏 (お茶の水女子大学助教)、湯川嘉津美氏 (上智大学教授) にご援助いただいた。ここに記して感謝の意を表したい。